

$$Y=C+I$$

ハロッド・ドーマーモデル

1960年代に成長を高くする。これは黄金時代と呼ばれた。

で、世界銀行が・・・何？日本語なのに聞こえない。

貯蓄というのは所得から消費を引いたモノ。つまり、 $S=Y-C$ 。

このモデルにはあと二つ関数を定義しなければならない。

貯蓄関数というモノ。貯蓄の行動。例えば三人人がいる。山田さん・田中さん・佐藤さん。

所得がそれぞれ、等しく10万円。しかし貯蓄が違って、それぞれ2万4万3万である。

貯蓄の構造はどういうモノかという、 $S=0.5Y$ つまり所得について何%貯蓄に回すのかという割合を示すことになる。これが行動パラメータ。上の式では0.5であるが、0.

35とか0.2である場合もある。こういった数字をエクセルに入れる。 $S=0.3Y$ とする。これらを計算すると貯蓄関数ができる。なので、この例のようにデータを集める。集めたデータをエクセルに入れる。するとエクセルから、 $S=\bullet Y$ という式が出て、この●が行動パラメータである。このパラメータの数値は途上国では低い。

モザンビークとタイと日本を比べると、日本が0.4、タイが0.3、モザンビークが0.

2とすると、これが貯蓄行動を示す。貯蓄というのはこの数字、パラメータをsとして、 $S=sY=0.3Y$ みたいな感じで表す。これが貯蓄行動を示すパラメータである(s)。小さいsで表すが、この0.2とか0.3みたいな数字であるということ覚えてほしい。

次は投資行動がどうやって決まるか。

投資行動は、何に比例しているのだろうか。加速度原理というので説明している。ということは所得に比例するのだが、その所得の加速度に比例する。つまり、

$I=\bullet(Y_{2008年度}-Y_{2007年度})$ というものである。この08年度から07年度を引いた差を Δ (デルタ)で表すので、

さっきの式= ΔY ということができる。 $\Delta Y_{08}=Y_{08年度}-Y_{07年度}$ という感じ。

ここから分かる経済成長率というのは、

$$Y_{08}-Y_{07}$$

—————ということになる。コレも覚えておいてほしい。

Y07

経済成長率はいくらになるかといったときに、この式の答え%ということになるというものの。

ということで投資関数は $I = a\Delta Y$ ということになり、この a がパラメータということになる。またデータを集めて I と ΔY をそれぞれ入れてエクセルでやると $I = \bullet \Delta Y$ という答えが出てきて、この \bullet がパラメータである。

ということで、今式が、

$$\textcircled{1} Y = C + I$$

$$\textcircled{2} S = Y - C$$

$$\textcircled{3} S = sY$$

$$\textcircled{4} I = a\Delta Y$$

という感じで四つある。この式をいじる。

$$\textcircled{1} \text{より } Y - C = I$$

すると $\textcircled{2}$ より $I = S$ となって、貯蓄と投資が均等になるということになる。

そしてこの式から $\textcircled{3} = \textcircled{4}$ より、

$$a\Delta Y = sY \quad \text{両辺を } a \text{ で割って、}$$

$$\frac{\Delta Y}{Y} = \frac{s}{a}$$

つまり、左辺について、

$$\frac{\Delta Y}{Y} = \frac{Y_{08} - Y_{07}}{Y_{07}} = \text{経済成長率となるので、}$$

結論を言うと、

$$\text{経済成長率} = \text{右辺} = \frac{s}{a} \text{ であるのだ!!!}$$

ちなみにこの s は平均貯蓄率という。

そしてこれは限界でもあるという。わからなくてもいいので。

とにかく s は平均の貯蓄率であるということは重要ね。

どういう意味かという、成長率というのは、 $= s/a$ とした。では成長率を上げるにはどうすればいいかという、 s (貯蓄率) を上げればいいので、貯蓄を上げればいいということになる。ということで貯蓄性向を高めれば経済は成長してゆく、成長率が高くなるということになる。これがハロッド・ドーマーモデルなのである。

これは1960年にできたのだが、その後あまり議論は進んでいない。

アルバイトするときに、例えば今は8時間している。それを九時間に増やすか増やさないか。というときに、1時間増やしたときに自分の感じる苦痛、これを限界苦痛というが、この苦痛が時給、賃金よりも小さければ当然働くだらう。これが限界に関する理論。これを増やして行って、仮に10時間に増やすときに、限界苦痛の方が大きくなるとすれば、それはもう働かないで置くという可決論に至るだろうということ。この限界苦痛は追加的限界苦痛とも言う。

最近貯蓄率が高いのは中国や韓国、日本であるが、この式には外国が考慮されていない。外国の存在が否定されている。外国を入れて考えるとまた話が変わってくる。 s が国内の s と外国の s 入ってくることになる。つまり $s = s_d + s_f$ (domestic と foreign) になる。

この s_f というのは外資導入である。外資を導入して成長してきたという側面もあるということが分かるだろう。

輸入代替政策 (145 頁)

それまで輸入していた製品に高い関税をかけて、輸入を難しくし、国内にその製品を生む。

例えばマレーシア。ここで、トヨタの車に200%の関税をかける。そしてマレーシアの国民車のプロトンという車を100万で売る。同じくトヨタが100万だとすると、販売価格は300万になる。そうするとマレーシアでは300万円のトヨタの車よりはマレーシア産の

100万の車を買おうと言うことになる。
これが輸入代替政策である。

輸出指向工業化というのがある。国内販売を目的とする製品ではなく、輸出可能な製品を工業化する政策。これはどういうことかということ、野球で言うと、輸出可能な製品とはイチローや松井、ふくどめ、松坂などである。コレは輸出指向なもの。ではサッカーはどうか。バレーやハンドボールは輸入代替政策の例なのである。輸入代替政策か輸出指向工業化かというのは、およそ輸入代替政策は産業政策と呼ばれるモノで高い関税をかけて国内産業を保護していくというモノ。ミャンマーなどは繊維産業を輸入代替政策で行っている。

成長率の話で言うと、日本が戦後に成長した話で言うと、貯蓄を挙げるしかなかった。戦後しばらくは外国からの外貨導入は見込めなかった。郵便貯金などの導入によって、貯蓄を挙げて成長してきた。そのときに、輸入代替政策を用いて成長してきたのである。そして成長をしてくると、輸出指向工業化に変化していったのである。これは来週やるが、韓国を例に挙げてやる。

韓国は1961年までは輸入代替がメインで、62から80までは基本的に輸出指向。80~84までは輸入代替。このように二つは繰り返されてきたというのがアジアである。基本的に90年代に入ると大体の国が輸出指向工業化を行っていった。